

湘南日独協会 会報
Der Wind
(風)

湘南日独協会会報(Der Wind)
VOL. 14. NO. 4. 通巻83. 発行 2012. 7. 15.

湘南日独協会
Japanisch-Deutsche Gesellschaft in Shonan
事務局：〒251-0025 藤沢市鵠沼石上1-1-1
江ノ電第2ビル7F
TEL0466-26-3028 / FAX0466-27-5091

設立15周年記念行事について

湘南日独協会は1998年11月14日に設立され、来年は15周年を迎えます。日独文化交流の発展にまた湘南地域でのドイツ語圏文化の紹介等の活動して参りました。15周年を祝うとともに次の発展を期したいと思います。

理事会としては早急に年間予定の作成と個々の行事の詳細の決定に取り組んでおります。

日時を決定しているのは前回の会報でもお知らせしております「合唱団アムゼル」の設立10周年記念演奏会です。

2013年5月19日(日) 鎌倉芸術館ホールで開催します。

先般今年の独日協会連合会総会がHalleで開催され、織田会長が出席されました。来年はHannoverで5月9日に開催予定です。この会議への出席とその前後のドイツ旅行を計画したいと考えています。その際Weimarで当協会の15周年を祝う案も持ち上がっております。これから詳細を検討することになりますが会員の皆様のご要望等をお聞かせ頂きたいと思っております。

年間を通じての取り組みです。これまでの例会では出来なかった事等も取り上げたいと思っております。講演会、音楽会、広くドイツ語圏の人達との交流会等皆様のアイデアを是非お寄せ頂きたいと思っております。

特に独日協会でも大きなテーマとなっていた若者への取り組み、湘南日独協会としても目下最重要なテーマです。15周年はしっかり取り組んで行きたいと思っております。

湘南日独協会

ドイツ語講座ご案内 (10月開講)

クラス：[初級] 土曜日 11:15～12:45

講師：小笠原藤子、Dagmar Kunst

[中級・会話] 土曜日 9:30～11:00

講師：小笠原藤子、Dagmar Kunst

[中級・講読] 土曜日 10:00～11:30

講師：松野義明

会場：藤沢カトリック教会

受講料：43,000円(20回)

湘南日独協会会員には割引特典があります

[申込・お問い合わせ先]

松野：TEL0467-32-7300 FAX 0467-32-7387

湘南日独協会の活動予定

■第82回例会 講演会

「ドイツにおける移民問題の現況」

講師 昔農英明氏 (日本学術振興会)

労働力の面から移民を受け入れていたドイツはその後移民問題に関して様々に議論されて来ました。日本でも少子化の影響からの労働力不足に対し、移民が急速に話題に上るようになっていきます。若い研究者による興味深い講演会です。

日時 7月29日(日) 14:00～15:45

会場 江ノ電第2ビル7F 湘南アカデミア

会費 1,000円

なお、16:00より懇親会(別会場・別料金)

■8月はお休みです。

湘南オクトーバーフェスト

恒例の湘南オクトーバーフェストを開催します

完全予約制です、お早目にお申し込み下さい

日時 9月23日(日) 18:30開演(開場18:00)

会場 グランドホテル湘南

会費 6,000円(お一人様)

出演 エーデルワイス・トリオ 合唱団アムゼル他

詳細は同封のチラシをご覧ください

なおお申し込みは必ず同封の振込用紙をご使用下さい。

振込領収書が参加証となります。当日は忘れずにお持ち下さい。

■10月懇話会

「仕事で接したドイツ企業・ドイツ体験」

スピーカー：三谷喜朗氏(会員：理事)

長年関わられたドイツとドイツ企業についての体験をドイツ語での苦労話も交えて縦横に語ります

日時 10月27日(土) 18:00～20:00

会場 江ノ電第2ビル地下1階「七福」(予定)

会費 1,000円(飲食代金は別料金)

新入会員紹介

(敬称略)

宮崎 征

林 哲裕

沢辺 昭夫

(11月以降は4頁へ)

特別寄稿 宮下啓三氏追悼

登山家としての宮下啓三氏

名誉会長会員

岩崎 英二郎

去る五月六日、七十五歳の若さで突然一胆管癌との辛い闘病生活を身近で看取っておられた奥様やお二人の御子息にとっては、むろん突然どころではなかっただろうが―他界された宮下啓三氏との初めての出会いは、もしもわたくしの記憶が正しければの話だが、1964年8月のある日、七里ヶ浜の海水プールでの偶然の邂逅（かいごう）にまでさかのぼる。あれは宮下氏が慶應独文科の博士課程に在学中のころだったにちがいない。いずれにして同氏とはほぼ半世紀に亘る付き合いであったから、思い出の種は尽きないが、そのなかから一つだけ、登山家としても知る人ぞ知る同氏の山登りにまつわるエピソードを書き記しておきたい。

あれは日本独文学会の研究発表会が新潟で開催されたときだったから、1975年秋のこと、手許の手帳を見ると、十月九日夕Ulrich Engel、宮下啓三両氏来訪、とある。それから十数年後の1988年に大著 Deutsche Grammatik を世に問うことになる エンゲル氏は、マンハイムにある Institut für deutsche Sprache（ドイツ国語研究所）の、当時たしかまだ所長だったと思う。新潟学会の直前に大磯のセミナーハウスで行われたドイツ語学ゼミナールの招聘講師として来日していたのだが、わたくし自身が1966年と1973年の二度に亘って比較的長期間同研究所に滞在していたこともあり、すでに旧知の間柄だった同氏から、せっかく日本に行くのならぜひとも日本の山にも登りたいという希望をかねがね聞かされていた。というわけで、拙宅でのエンゲル、宮下両氏の打ち合わせとなったわけである。

ここに一枚の写真がある。日本の地図を前にして、ひげづらのエンゲル氏と、御覧のようにいかにも若々しい宮下氏とが、登山予定の谷川岳について話し合っているところを誰かがスナップしたものである。

それでは実際の谷川岳登山はどのように行われたのだろうか。それについては宮下氏自身が、ドイツ語関係図書出版の老舗（しにせ）である郁文堂のPR誌Brunnenの1976年四月号に、「悪魔山の天使教授―エンゲル氏、谷川岳に登る―」と題する一文を書いておられるので（Engelというドイツ語は、英語の angel と同様、「天使」を意味する）、そこから適宜抜粋してお目にかけることしよう。



「日本独文学会には、私の知る限りでは、日本山岳会の会員でもある者が三人いる。井手貢夫氏と福田宏年氏、そして私。この私は、新潟での学会での前日、完全なアルピニスト姿で上野駅にあらわれて、同じ列車に乗り合わせた芦田淳雄氏や小塩節氏らの目を驚かせた。どうみても学術的な催しに参加する者のように見えなかったからだ」「私は新潟行きの直前にエンゲル氏と初対面して、日本の山岳についての簡単な講釈をおこない、三千メートル級の魅力ある山々があることを認識してもらった上で、谷川岳自体はさほど素晴らしい山岳ではなく、島国の背骨の一つで気象変化に富んでいるために、多雨期の十月に好展望を期待しない方がよい、と語った」「氏が学会での講演を終えてから離日するまでには正味二日、その間に新潟・東京間の旅程がふくまれる。してみれば、北アルプスの高峰は思いもよらず、唯一の可能性は地の利をえた谷川岳よりほかにはなかった」「新潟を朝早く発って水上（みなかみ）の宿に荷をあずけ、二人とも山歩きにふさわしい態で谷川岳のふもとに着いたのは、学会第二日目の昼の時刻だった。学会の業務を理由に学会を抜け出すのは私には最初の経験だった」「どのみち時間は乏しく、日暮れの早い秋のこととて、天神平までロープウェイであがって、あとは尾根道を散策してから適当に見切りをつけて谷川温泉にくだればよい、と私は多寡をくくっていた」「曇り空ではあったが、展望は悪くはなかった。それに日本独特の目もあやな紅葉、それも赤一色ではなく、黄、赤、茶、緑のだんだら模様が美しかったし、木草の色どりがエンゲル氏をいたく喜ばせた」「このあたりで昼食にして、昼寝でもして下山しよう、というせりふをどこで言おうか、と私は思いつづけていたのだが、それでころではなかった。二人分の雨具、食料、懐中電灯等々万全の備えを背に負った私の遅い歩みを尻目に付けて、氏は畏敬すべき軽快さで登った。いや。途中で荷を氏が背負ったから、労力の負担に関してはアルピニスト同士公平に分ちあったといわなければならない。そして荷を私から奪ってさえも氏の軽快な歩みはおとろえなかったとも書きそえよう。私たちはガイドブックに示された標準タイムを半分近く短縮して、谷川岳の双耳峰の一つに達してしまった」「名物の霧につつまれて寒気に身をふるわせながら、私たちはスプーをあたため、一群の若者たちが一の倉の岩場を登攀中の仲間たちとハンドトーキーで交信しあっているさまを眺めながら、悪魔山の頂（いただき）の一刻をすごした。雨滴が去来する霧にまじったのもわ

ずかの間のことで、悪魔どもは天使に敬意を表したのであろう。氏も私もいつのまにか食欲になり、同じ道に戻ることを嫌って、西黒尾根をおりる決心をした。最終バスに間に合いそうもないが、とにかく出発。結局、私たちは二時間足らずで駆け下って、最終バスを心配するどころの段ではなかった。「爽快な秋の日の登降だった。案内する者される者といった関係はとうに消え、私たちは完全な仲間になりきっていた」「快く疲れた身を、私たちは宿の大風呂の熱い湯に沈め、そして同じ部屋で枕を並べた。ホテルの名にだまされてバス付きの洋間と思っていたところが、私たちは純日本式の宿に泊まることとなったからだ。そして翌朝、私たちは一夜のうちに谷川岳の頂近くに今年初めての雪が降りつもったことを知った」「東京に向かうまでの数時間をさえ惜しんで、雨の中を私たちは谷川温泉から奥の溪谷に足をはこんで、日本的な秋の雨と谷の情緒をたのしんだ。東京での別れの言葉は、この次は是非（ぜひ）…、というのであった。それだけで十分に意の通じあう言葉だった」。

いかにも宮下氏らしい、いささか気取った語り口だが、アルピニストとしての宮下氏の面目躍如たる文章で、エンゲル、宮下両氏の谷川岳登攀の顛末（てんまつ）が生き生きと描かれている。

マンハイム近郊のヘッペンハイムに住むエンゲル氏はいまだに健在だが、宮下氏の訃報を耳にしたら、さぞかし驚くことだろう。改めて心から御冥福をお祈りする。

追悼 宮下啓三さん

会員 古橋 昭子

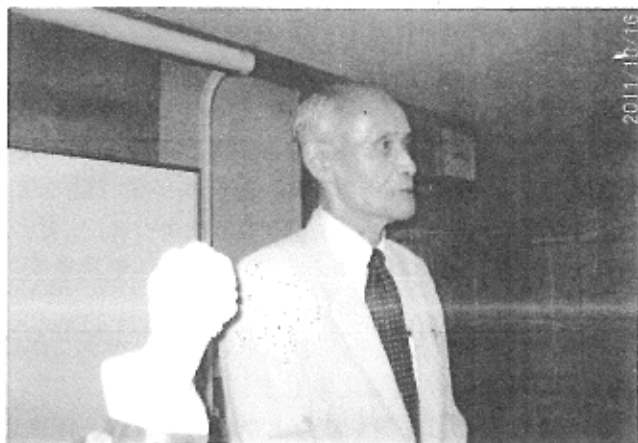
私が宮下さんに初めてお会いしたのは今から50数年前、私が鶴沼の湘南学園の先生になった時で宮下さんが高校1年の時でした。高2になる時には慶應義塾高校へと転校して終い以後会う事もなく過ぎていました。

今から15年前、湘南日独協会初代理事を務めた川本さん（私が彼と初めて会った時彼は中2の生徒でした）から湘南日独協会を設立するので参加をとの電話をいただき鎌倉で行われた発会式に出席した時私の前の席に座った宮下さんを見て思わず“あなた啓三ちゃん？”と即、声を掛けた程変わっていませんでした。頭のてっぺんは大分うすくなってはいましたが！以来私はドイツ語の講座のお世話をさせていただき、宮下さんは織田副会長と共に副会長として、岩崎初代会長と共に当協会の発展に力を尽くして来られました。ドイツ文学の大物である他、絵画の技術にも巧け一方山にも詳しく、北アルプスの殆どを歩いた私とも山の話にも通じるものがありました。

一度二人で藤沢のおでん屋に飲みに行き、お互いに知らなかった話をしたこともなつかしく想いされます。会として大切な人に逝かれて終わりました。

最後に私と宮下さん共通の望みは会員名簿を作る事です。嫌だと云う方は載せなければ良いではありませんか。名簿の無い会なんてあり得ないと云うのが宮下さんの主張でした。私もそう思います。

宮下さん長いことありがとうございました。



宮下啓三氏には2011年10月16日（日）湘南日独協会特別例会において、湘南日独協会のための講話「ドイツ民謡と歌曲と詩の言葉についての話」と題されてのご講演を頂きました。

当日は遠方から駆けつけられた方々も多く盛会でした。左の写真は当日、先生がドイツで贈られた記念のゲーテ像を手にしての講演のご様子、右は講演終了後の懇談会（先生ご紹介の場所）で先生ご夫妻を囲んでのスナッフ写真です。（大久保）

5月例会に出席して

「福島原発事故の現状と問題点」講師 松野義明氏

会員 小田 武司



(小田 武司氏)

福島原発事故が発生してから既に1年2カ月が経過しています。空気中や地表の放射線量や、食品に含まれる放射線量がしばしば話題となり、テレビなどでも原発に否定的な人が大幅に増えているように

思われます。そのような環境で、今回の松野先生の講演は専門的な知識と情報に基づき、且つ具体的な数値に基づく内容で、現実的な対応をしていくために非常に役立ったと思います。「放射線なんか自然界にいくらでもあるから、少しぐらい余計に浴びたって平気だ！」という無謀豪胆型反応も良くありませんが、「放射線は極微量でも怖い！食品汚染が基準値以下なら大丈夫というのは以ての外、1ベクレルでも許せない！」という完全潔癖型反応も間違いで、「確かな知識をもって理性的かつ合理的に恐がること！」ということが非常に重要であるとのご意見に大賛成です。このような説明を一般の人々、特に完全潔癖型の方々に説明される機会がもっとあれば、風評被害にしてもっと鎮めることができるのではないのでしょうか。



(講演会会場)

今後のエネルギー政策についても言及されました。福島原発事故発生後の対応をテレビや新聞でみておると、あまりにも技術的に不可解なことや、理解し難い説明があちこちにありました。それが何によっていたのか、今回の講演でほぼ分かったように思います。

松野先生のお話のように、これからの方向は「脱原発を計画的に進める」か、「全原発の即時停止」かの選択になるでしょうが、全原発を直ちに停止して、電力不足に陥ってしまったり、電力料金が大幅に値上げされたりするのは、現在既に過度に進んでいる製造業の海外移転を一層推し進めることとなり、産業空洞化と雇用の減少など、更なる問題を引き起こしかねません。

ただ、脱原発を計画的に進めるためには、限定された原発を再稼働することになりますが、当然のことですが福島原発の教訓をフルに活かして、自然災害に対する万全の対策が早急に講じられるべきだと思います。

絶対に同じ過ちは繰り返さないという確固たる信念をもって、この問題に当たるべきだと思います。今回の件で被害が広域に渡ることがはっきりしましたから、再稼働に当たっては、政府はその広域の住民がそれを受け入れられるような万全の対策を講じるべきであり、またその内容を分かり易く説明すべきだと思います。

難しい課題にもかかわらず、松野先生の非常に分かり易いご説明でしたので、参加された方々も講演会後の懇親会ではすっかり和やかに談笑なさっていたように思います。このような講演会を開催していただき、誠にありがとうございました。

☆☆☆☆☆ ☆☆☆☆☆ ☆☆☆☆☆
1頁よりの続き

行事予定

■第83回例会 講演会

「グリムこぼれ話」

講師 橋本孝氏 (日本グリム協会会長)

グリム兄弟と日本との関わりを主題に余り知られていない逸話も交えてお話頂きます。なお、橋本氏はとちぎ日独協会の会長でもあります

日時 11月25日(日) 14:00~15:45

会場 江ノ電第2ビル7F 湘南アカデミア

会費 1,000円

懇親会を16:00より別会場、別料金で予定しています

■望年会

日時 12月15日(土) 18:00~

会場 KKR 江の島ニュー向洋

詳細は未定

編集後記

5月宮下啓三先生がお亡くなり本当に残念でなりません。先生と親しくお酒を飲みながらの時間は実に刺激的で楽しい一時でした。ドイツ、ドイツ文学ばかりではなく勿論、音楽・絵・登山と様々な世界を開いてくれました。湘南日独協会での最後の講演の際、先生のご要望で合唱団アムゼルの仲間とドイツ語の歌を歌いました。打合せ無しでした。講演終了後「歌ってくれてありがとう。その間話を休めて良かった。」と言われました。「教室では立つのが慣。」と疲れを見せずに、また懇親会も楽しんでおられました。

追悼のお言葉をお寄せ下さいました、岩崎英二郎氏、古橋昭子氏に心から御礼申し上げます。

宮下啓三氏のご冥福を衷心よりお祈り申し上げます。

(大久保)

★★ 湘南日独協会のホームページ ★★

<http://jdg-shonan.ciao.jp/>

「全国日独協会一覧」からもアクセスできます。